

Title	昭和九年秋季平泉・松島仙臺方面見學旅行記
Sub Title	
Author	高橋, 碩一(Takahashi, Shinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.1 (1935. 4) ,p.165- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0165">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0165</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 彙報

## 昭和九年秋季平泉・松島

### 仙臺方面見學旅行記

昭和九年十月十二日(金)午後七時廿五分上野驛發、秋季見學旅行の途につく、一行は指導教授伊木壽一先生を初め、坂本徳太郎、徳永康信、保坂三郎、高橋碩一、高橋誠一、山口清重、佐藤正三、會田倉吉、石川博道の十名。

翌十三日(土)午前七時廿一分平泉驛着、直に自動車にて關山中尊寺に赴く。

先づ本坊に刺を通じ直に峰藥師堂に參詣す、本尊金色の丈六藥師は運慶の作と傳ふ。

金色堂、里俗之を稱して光堂といふ、天仁二年藤原清衡の建立にかゝり、清衡・基衡・秀衡三代の遺骸を納めたる靈廟たり。内に三壇を構へ、彌陀・勢至・觀音・六地藏・多聞天・持國天を安置す。各法橋定朝の作と傳ふ。もと中壇に清衡、左壇に基衡、右壇に秀衡、三代の棺を納めたりしが、之を中央の一所に寄せ集めたりといふ。秀衡の棺側には泉三郎忠衡の首桶ありといふ。四本の柱は七寶莊嚴の卷柱、十二光佛を圖現し、柱梁には螺鈿珠玉を鏤め、四壁内外紗羅布を以て包み、黒漆を厚塗にして金箔を貼し、

全堂悉く金色を以て輝きしも今はその片影により當時の莊嚴なりし様を偲ぶのみ。

經藏 天仁元年藤原清衡の建立にかゝる。元來二階造なりしも建武四年上層焼失し下層のみ残る。内に八架を設け三種の一切經及び經管二百六十六を納む。清衡奉納のものは紺紙金銀泥の一切經(卷子)にして一行交りのもの、基衡奉納のものは紺紙金泥の一切經(卷子)、秀衡奉納のものは宋版の一切經(折本)なり。此他、螺鈿卓一脚、螺鈿八角須彌壇一基等を存す。古文書には名高き北畠顯家の筆寫せる清衡の願文一卷等あり。

寶物館 山内諸院出陳の寶物を觀る。就中一字金輪佛木造坐像は、清衡が天治元年建立せし中尊寺金色堂の南なる山王社の配佛にして、肉色の大日金輪なるが故に、世俗之を人肌の大日と稱す。その玉嵌は現存玉嵌中最古のものと稱せらる。またその體內を空洞にして、背部を省きて平肉彫となせるが如きは、よく藤原式の特徴を具へたるものと云ふべし。この外、御經藏領骨寺古繪圖(天治三年三月廿四日鎮守府將軍藤原朝臣清衡とあり)。胎金兩界曼荼羅(傳智證大師筆)二幅。鎌倉時代より江戸時代に互る古文書等、多數の陳列あり。

辨財天堂 寶永二年伊達綱村、此堂を建立して本尊を納む。左右の壇上には藤原清衡が長治二年最勝院を建立して納めし最勝王經十界寶塔曼荼羅十幀を安置す、紺紙に金泥の細字を以て十層の塔形を圖し、その左右及び下部には經の大意を彩畫せるものなり。最後に繪畫館を見て白山神社の邊より、衣川の古戰場を望み、こゝに中尊寺の見學を了え、自動車にて醫王山毛越寺に向ふ。

途中、高館(判官館)に登る。頂上に一堂あり、義經堂と稱す、義經の胴體を埋めたる所なりと傳ふ。堂は天和三年伊達綱村の建立にかゝる。正面に「白幡大明神」の額あり。此處より望めば、東方北上の流域を隔て、歌に名高き東稻山は眼前にあり、また藤原氏の館址、柳御所跡、伽羅御所跡及び秀衡建立の新御堂跡など附近にあれども、北上川の西遷等の爲めに、遺跡を失へるもの少からず。

**毛越寺** 此寺は嘉祥三年慈覺大師の開基にして、其後、長治二年堀河、鳥羽兩天皇の敕願によりて、藤原清衡以下二代の間に再建あり、頗る盛大なりしが、藤原氏滅亡後、嘉祿二年野火に罹りて大半烏有に歸し、爾來舊觀に復さずして今日に至れり。然れども往時の大泉池は今もなほ池形を存し、其ほとりには南大門等の礎石さへも明らかに數へられ、殊に近時發見の圓隆寺の遺跡は最も興味深きものありき。當寺本支院の寶物は多く寶物館に陳列せられ、清衡奉納紺紙金銀泥の梵網經一卷、藤原秀衡書寫紺紙金泥の法華經一卷、九井勝茂筆の平泉古繪圖一枚、熊野三社(新熊野)木像三軀、元龜壬申年三月朔日付伊達輝宗判物等あり。

平泉の見學を了り午後零時八分平泉驛發、二時十七分松島驛着。バスにて松島海岸に至り、小憩の暇もなく直に五大堂に至り、更に新富山に登りて、日本三景の一、松島の全景を一望の中に收め、次いで瑞巖寺に詣す。

此寺は、人皇五十三代淳和天皇、天長五戊申年、慈覺大師圓仁の開基にして、比叡山々王權現の分靈を奉じ松島に下り、支那の四明山茲に比叡山の堂塔伽藍を模倣して一寺を營み青龍山延福寺

と稱す、後圓福寺と改めたり。狩野山樂、狩野左京の壁、襖、板戸に描ける結構極る松、櫻、千鳥、鷹の間を過ぎ孔雀の間に至る。中央には、當山の開基伊達政宗の木像を安置す、その子忠宗の時の作なり。左右の壁には瑞巖寺前住歷名を立掛く、右側のものには寛文十三癸丑春、現住鵬雲東搏拜書とあり、左側のものには、寛政四年壬子三日、文溟嗣子源文叔建之とあり。文王の間、入口には慶長十有五歳上章閣茂孟陔立春と記せる、虎哉宗乙の松島瑞巖寺の額一面を掲ぐ。内部には探幽法印行年六十九歳の筆とある、中央維摩居士、左右山津の三幅對あり、贊は黃檗の隱元なり。御座の間の正面には仙臺藩五代の主、獅山公吉村の「圓滿」の額を掲ぐ。明治九年明治大帝の便殿となりしより玉座の間と呼ぶ。玄關の欄間には左甚五郎の作と傳ふる彫刻あり。この玄關の造作は、唐の徑山寺の型を取りしものなりと云ふ。

當日は不幸にして係の方の不在の爲め、前回の旅行に於て見學せる寶藏の什物等を拜見し得ず、僅に支倉常長のローマより持ち歸りし燭臺他數點目下出陳中のものを見學するに止りしは残念をりき。

瑞巖寺を辭し同寺境内の無數の岩窟を見る。ここは皆僧侶の坐禪の跡とか。

海岸にて小舟一艘を得、灣内に出づ。群嶼の奇景は各翠松を頂き、その海上の點々とする間を、右に、左に、舟を進むれば眞に送迎に疲れ自ら畫中の人となる、正に詩景なり。

舟を先づ雄島に寄す、小野小町の傳説ある所なり。頼賢の碑を見る。元の歸化僧寧一山の書を刻せるものにして、我が國最初の

假名の碑として名高きものなり。

更に舟を灣内に進めて、心ゆく迄松島の絶景を嘆賞し、こゝに第一日の行程を了へ、松島ホテルに一泊。

翌十四日(日)午前八時松島發、海路、鹽竈に至り、國幣中社鹽竈神社に参拜す。

境内に文治神燈竝に日時計あり。前者は文治三年藤原秀衡の三男、和泉三郎忠衡の寄進せるものにして、開扉と蓋とは後世の修補にかゝる。後者は寛政四年、禰宜藤塚式部の獻納せるものにして、林子平の考案にかゝれるものといふ。

参拜後、宮司古川左京氏以下の懇切なる接待を受け、社務所に古文書、古書籍等を見學す。左に主なるものを列擧すれば

古文書

○文治二年四月廿八日 公文所下文案 一通

吉良貞家裏封

○建久四年三月七日 將軍家政所下文案 一通

吉良貞家裏封

○嘉祿三年三月二日 關東下知狀案 一通

○觀應元年九月七日 禰宜安大夫目安案 一通

○觀應二年十二月廿三日 吉良貞家下文 一通

足利尊氏袖判

○延寶三乙卯十一月廿五日 大條宗快右下文添書 一通

○文和二年卯月廿七日 伊賀守廣家打渡狀 一通

○文和三年十一月八日 左京權太夫 一通

○文和五年二月廿五日 治部大輔源朝臣奉賀狀 一通

○延文五年卯月廿八日 宮内大輔源朝臣寄進狀 一通

○同日 同人願文 一通

○延文六年二月十八日 左京權太夫奉書 一通

○應安三年十二月十七日 右京太夫貞家寄進狀 一通

○大永四年十月廿三日 留守景家證狀 一通

○元龜三年三月十七日 留守政景立願日記等 一通

他に伊達忠宗、龜千代(綱村)の黒印狀、同吉村の朱印狀等。

古書籍

○垂統大記七十二卷(奥書共)。

○出雲國風土記。

○本朝古代年號讀樣(藤塚式部捺印)

○類聚三代格

奥書に「天明四年甲辰八月皇大神宮林崎文庫村井古巖印」及

「林崎文庫印」あり

見學後、鹽竈名物の饗應にあづかり、午後一時、辭去、程近き

御釜神社に参拜す、志波彦大神の始めて鹽を焚き給ひし時の釜と

傳ふ。

これより自動車二臺に分乘、多賀城址に至り、有名なる多賀城

碑を見る。

傳に依れば、この碑は昔、多賀城門に立て、四境の遠近を示し

たるものにして、當時蠻夷の來り侵すや京師に報じ、四隣に告げ、

或は兵を募り軍を出す急遽勿卒の際、此碑に依り遠近を量り、日

子を定め緩急臨機の計を施したるものといふ。されど學者の説に

ては、後世の作なりとも云はる。次で正廳址を始め城内の遺跡を

踏査し、再び自動車にて仙臺に向ふ途中、燕澤に下車して蒙古の碑を見る。午後三時、仙臺、東北帝國大學に至る。當日は休日なりしにも拘らず、我々一行の爲め、特に多數諸氏の歓迎を受けし事は、感謝に勝へざる所なり。

先づ、大島延次郎學士の案内にて圖書館に至り、我々一行の爲め、特に出陳せられし古文書、書籍類を見學す。解説は高柳桃太郎氏これに當られたり。左に主なるものを擧ぐれば、

書籍類

○佐久間洞巖自筆奥書付

享保四年東奥州觀迹聞老志。

○林子平 三國通覽圖說(原刻本)。

○林子平 海國兵談

絶版となりしものにて「千部施行」の印あり。

○河村秀根自筆寫本

山城、肥前、常陸、相模の風土記。

○法隆寺律學院舊藏

聖德太子傳曆 二卷 應仁二年鈔。

○壬生官務家舊藏

類聚國史第二十五

こは鎌倉時代初期のものにして、最も古きもの一つとせらる。前田家の所藏本が百卷代なるに比し、珍重せらるべきものなり。

古文書

○北畠顯家袖判の國宣三通。

○弘安十年、永仁三年の鎌倉幕府下知狀。

こは『文化』一ノ十に大島延次郎氏が「朴澤文書に就いて」と題し紹介せられしものなり。

○新田義貞證判の軍忠狀(元弘三年十月)

○北畠顯家の着到狀(建武二年十二月廿三日)

○徳川齊昭書簡

見學中、我が史學科に縁故深き大類伸博士が、わざわざ出向せられしは、一行の最も光榮とする所なりき。

圖書館の見學を終り、岡崎文夫教授曾我部靜雄助教を始め東北帝大史學會諸氏の心からなる茶菓の饗應に歡談は何時果つとも見えざりしも、未だ先を急ぐ事として、厚く厚志を謝し、更に考古學標本室を見學す。解説は伊東信雄學士當られたり。

特に注目されしは石器時代繩紋式土器の秋田縣龜岡式のものにして、甚だ數多く所藏せらる。

又、アイヌ、オロツコ、ギリヤーク等の民俗研究の參考資料多數あり、又朝鮮の石器も内地にしては珍しきものなり。

更に、日本石器時代のもの全部標本的に集められあり、左に主なるものをあぐれば、

○磐手縣大泉町山中の遺跡より出土せる、

宋錢を入れたる石器。

○秋田縣北郡出土 玉製石斧。

こは石器時代既に日支交通ありし證據なり

○日高國厚別出土 日本刀

こは當時未だその地が石器時代なりし證據なり。

その他、津輕出土の石棒、石槍等、萬般整備せられ居るに一同讚嘆の聲をあぐ。

午後四時五十分、東北帝大を辭し、自動車にて市中見學にうつる。猶、市中見學は佐々久學士案内の勞をとらる。

**瑞鳳殿** 青葉城趾の東南方經ヶ峰に在り、老朽の間に伊達家初代政宗の瑞鳳殿、二代宗忠の感仙殿の二靈廟あり、何れも國寶に指定せらる。靈廟の周圍に殉死者十數名の墓あり。

更に自動車を急がせ、仙臺の天下に誇る要害、**青葉城址**に登る。

大手門は青葉城唯一の建築にして、豊太閤征韓の砌り肥前名護屋に建設せる本陣の營門なりしを、慶長五年伊達政宗が拜領し移築せるものといふ。現に特別保護建造物たり。本丸址より眺むれば、廣瀬川は城地をめぐりて、天然の城壕をなし、川を隔て、仙臺市街は勿論、宮城野より遙か遠く海上に點々する白帆迄、一望

の中に求め得らる

青葉城を下り大崎八幡に詣る。

慶長十二年伊達政宗の新造せるものにして、桃山時代建築の粹なり。意匠簡素ながら繪様彫刻縦横に用ひられ、漆地に彩繪を施したる傑出の權現造社殿なり。

大崎八幡の見學を終りし時は、既に暮色迫り來りし爲め、林子平、支倉六右衛門の墓等を残念乍ら割愛し、直に國分寺跡に車を飛ばし、夕闇の中に、巨大なる礎石を踏査せり。

以上を以て豫定の行程を了へ、午後六時十分、仙臺驛に於て、一同は伊木先生の三日間に亙る御指導を厚く感謝して解散せり。斯くして、本見學旅行は、大なる收穫と深き印象とを得て無事に、有益に終りを告げぬ。最後に、この旅行中、東北帝國大學、鹽竈神社を始め諸所に於て、懇切なる便宜を與へられし諸氏に對し、茲に謹んで深謝の意を表す。

(高橋 碩一)